病院図書室　18(1):19-23, 1998

臨床に役立つ雑誌⑭　－神経内科－

# 神経学分野の雑誌について

陸　重雄

## 1．はじめに

神経内科は、名称そのものが一般になじみがうすく、どういう疾患をあつかっているのか、よく理解されていない面がある。時に医師でさえ誤解していることがあるので、最初に概略を説明しておく。脳や脊髄、末梢神経、筋肉などの病気を対象にしており、病名でいえば、脳卒中、頭痛、めまい、てんかんなどポピュラーなものから、パーキンソン病、脊髄小脳変性症、運動ニューロン病などのいわゆる難病、更に最近狂牛病で有名になったクロイッフェルト・ヤコブ病、感染症である脳炎、髄膜炎、筋ジストロフィーや多発性筋炎などの筋疾患、往年の名優が罹患したことで病気が知れわたった重症筋無力症など、聞きなれないものまで実に多彩で、疾患の種類が最も多い診療科と思われる。

しばしば心療（内）科、精神科、神経科（精神神経科）などと混同されているが、こちらはもっぱら心や精神の病を対象としており、眠れない、ストレスで気分が沈む、精神的な原因で体調が悪いなどという人は、神経内科よりこれらの科が適当である。

診療科の名称としては、神経内科（一部では脳神経内科と言う施設もある）であるが、学問としての名称は、英語の neurology を訳して、神経学（または神経内科学）を用いている。

りく　しげお：社会保険中京病院神経内科主任部長

## 2．本稿で選択する雑誌

神経学も当然ながら内科学の一部であり、N Engl J Med や Lancet をはじめ、種々の総合誌・内科系一般の雑誌に神経関係の論文が発表されているが、本稿ではとりあげない。「神経学」の分野に属する雑誌（Year Book を含む）のみ選択して紹介する。神経学の総合誌と、各分野別の代表的な雑誌を選ぶことにするが、近年神経学の分野が長足の進歩をとげ、関連雑誌は膨大な数にのぼるので、臨床という観点に主体を置いて選考する。

雑誌という基準からそれるが、神経学を語る時に欠かせない書物があるので、ここでふれておく。「Handbook of Clinical Neurology」(Amsterdam: Elsevier) は handbook の名に反し、神経学の百科辞典であり、バイブルである。1964年若いオランダの医学者、Vinkenと Bruyn がこのシリーズの出版を計画し、後に医学書出版において20世紀を代表する偉大な業績と称されるにいたった。1969年に第1巻が世に出、1982年に第44巻（第1～43巻の総合索引号）でいったん終了し、1984年に Revised Series として第1巻（通巻第45巻）から再出発した(Vol.45/ Revised Series 1 と表記)。数々の大系本が出版されているが、本シリーズは質、量ともに優れており、筆者も、かつてわからないことがあると本書にあたり、知識を深めることができた。当院の図書室にそろっているが、最近読まれることが少ないようで、残念でならない。

「Advances of Neurology」(New York:Ra-

ven press）は1973年に第1巻「Huntington's Chorea:1872-1972」が発行され、その後、年に2～5巻程度刊行されている。本書も各巻のテーマに対しその時々の知見が豊富に記載されており、良書である。当院では長い間購入してきたが、予算の制限があり、現在では途絶えてしまった。

神経学を学ぶ者のいる病院・研究所・大学などの図書館（室）では、こうした「偉大な業績」は是非そろえておくべきだと思う。以後に紹介する最新の情報を届ける雑誌と、重厚な大系本は両輪の輪であり、両者をひもとくことで、より広範で深い学問的興味を満たすことができるのではないだろうか。そんな考えで紹介をすすめることにする。

### 3．国内の雑誌

神経学の分野は多くの関連学会を有し、個々に学会誌（機関誌）を発行しているので、代表的なものを紹介する。神経学の中心となる学会は日本神経学会（以下の学会名からは日本を略す）であり、学会誌として「臨床神経学」が月1回発行されている。神経病理学会は英文誌「Neuropathology」(Blackwell Science Asia)、自律神経学会は「自律神経」、脳卒中学会は「脳卒中」、神経治療学会は「神経治療学」というように学会名が雑誌名となっている。これら以外に、脳波・筋電図学会、リハビリテーション医学会、神経化学会、失語症学会、神経心理学会、てんかん学会、頭痛学会、その他、各専門分野に分かれており、相当に多い。

学会誌以外では、歴史のある雑誌として、「脳と神経（Brain and Nerve)」、「神経研究の進歩」（いずれも医学書院）が挙げられる。前者は1948年に「脳及神経」という名称で発行され、今年（98年)で50巻を迎えた。主に原著と症例報告で構成され、一部総説などを含んでいる。当初は準学会誌としての役割を果たし、脳神経外科や小児神経領域も多く扱っている。後者は1956年の発刊で、隔月に発行され、本そのものが厚く、値段も高い。特集を中心に据えた専門分野の総説的内容でレベルが高い。一部原著論文を掲載することがある。神経病理学会が学会誌を作る前には、本誌の1号分を学会の抄録と推薦論文にあてていた。また年1回行われる「脳のシンポジウム」は、現在でも本誌に特集として掲載されている。

「神経内科」（科学評論社）は1974年に発刊された比較的新しい雑誌であるが、特集としての総説と原著論文など投稿原稿をバランスよく配してあり、人気がある。「Clinical Neuroscience」（中外医学社）は現代風で図や写真が多く、色刷りで、神経学一般の入門書的要素が強い。「Brain Medical」（メディカルレビュー社）は神経学についての広範なテーマを毎号特集しており、知識を拡げるのに役立ちそうである。

Year book として、「神経科学レビュー」（医学書院）と「Annual Review 神経」（中外医学社）がある。前者は文字通り神経科学が対象で基礎的内容が主体であるが、臨床家にとってもわかりやすく書かれている。1987年に第1号が発刊され、当初は最新トピックスを紹介するトピックスレビューと、過去1年間における国内外の重要論文を紹介するアニュアルレビューの2部門から構成されていたが、第4号からトピックスレビューのみに編集方針が変更された。この第4号では、14題のテーマがとりあげられており、各テーマについての知識は詳しく知ることができるが、神経科学全体の情報を得るには不都合である。「Annual Review 神経」は、初巻が1985年に「1986」というタイトルで発行された。編者によれば、本書は「1年間の神経学の進歩をまとめて一冊の情報として読者に提供する企画」とされている。基礎的な Basic Neuroscience にはじまり、検査法、治療法のほか、感染症、脳血管障害など各疾患・分野別に数編ずつレビューがなされており、最近の知見をまとめて理解するのに有用である。

2種類の Year Book の紹介が長くなったが、神経学に関係する雑誌の発行は非常に多

く、すべてに目を通すのは不可能である。本邦には一部を除いて充実した総説誌が少なく、こうした形式の雑誌が発刊されたことは非常に喜ばしいことである。

### 4．欧文誌

日本の医学は歴史的にドイツ医学の流れを受けてきたとされるが、神経学の分野ではフランスが神経学の巨星を数多く輩出しており、その影響は世界的にみても大きなものであった。フランスの神経学者の名がつけられた疾患は枚挙にいとまがなく、また神経症候もフランス語で記載されたものが多々あり、どのように発音すべきか頭を悩ませられたものである。しかし近年では医学一般の傾向として、英語圏の雑誌が台頭し、英語で書かれていない雑誌は読まれる機会が激減しているようである。第1次世界大戦終了後10年たった1928年に独語圏で発刊された「Nervenarzt」(Berlin:Springer)、19世紀末の1893年にパリで産声をあげた有名な「Revue Neurologique」(Masson)などでさえもインパクトファクターが0.5から0.6程度で、寂しさを禁じ得ない。

これに比し米国を中心に英語圏は増々勢力をのばしている。米国では「Annals of Neurology」「Archives of Neurology」「Neurology」の3誌が代表的である。「Ann Neurol」は1977年の発刊で American Neurological Association と Child Neurology Society の機関誌である。3誌の中では最も歴史が浅いが、現在では一番レベルが高く、インパクトファクターは8.715と非常に高い。論文も学際的色彩の強い充実したものが多く、基礎的な内容を含むものが少なくない。「Arch Neurol」は、はじめ1959年に AMA (American Medical Association)から出版されたが、1960年の第3巻から American Neurological Association の機関誌になった。その後「Ann Neurol」が同学会の機関誌として刊行されたため、再び AMA の雑誌となった。臨床的な論文が主体で、とっつきやすい。しかし字が小さく印刷も紙も上質とは言えず、論文自身の質は別として、読みづらい面がある。「Neurology」は American Academy of Neurology の機関誌で、1951年に発刊され、この3誌の中では最も古い歴史を持っている。表紙が緑色であることから、グリーンジャーナルあるいはグリーンニューロロジイとして親しまれてきた。臨床家が1冊選ぶとすれば標準的な雑誌として本誌が適当と思われる。

英国には、「Brain」(Oxford:Oxford Univ Press)と「Journal of Neurology」「Neurosurgery and Psychiatry」(JNNP;London: BMJ pub group)の2誌がある。「Brain」は今から120年前の1878年に第1巻が刊行され、かつて、神経学の分野でさんぜんと輝く金字塔とも言える地位を保っていた。ぶ厚い本に長文の論文がそろっており、文献をコピーして、ホッチキスでとじるのに苦労することもあった。しかし、1997年から年間12号発行され、サイズも大きくなったため、1冊の厚さは半分程になった。最近では、「Ann Neurol」が「Brain」を越えたと思われるが、年輩の神経学者には、なお「Brain」に対するあこがれが強いような気がする。膨大な数の研究発表がなされる昨今では、論文の簡潔さということも採否の評価のひとつになっており、長い論文にはいささか抵抗を感ずることもある。「JNNP」は臨床の知見が多く、臨床家には有益な雑誌である。本誌は「Brain」に比し著しく薄い本であるが、細かい字でびっしりと書いてあり、読みづらい。数年前からA4サイズに拡大され、多少読みやすくなったのが救いである。

これら以外に、ヨーロッパで発行されている英文誌がある。「Acta Neurologica Scandinavia」(Copenhagen:Munksgaard)、「Europian Neurology」(Basel:Karger)、「Journal of Neurology」(Berlin:Springer)の3誌が一般的で、1960年-1970年頃に現在の名称に変更されて出版されるようになった。前述した5誌に比べるとインパクトファクターはやや低く1〜2の範囲にとどまっている。「Journal of Neurological Sciences」(Amster-

dam:Elsevier)はタイトルから判断すると、神経科学の基礎的な雑誌のように思われがちだが、実際は臨床研究が多く、ここにあげた雑誌と同一範疇に含めて良い。インパクトファクターは1.735で「J Neurol」と「Eur Neurol」の間にある。ただこうした International Journal は購読料が高いのが普通で、個人が購入するには適さない。

最近の知見を紹介する総説誌として1988年に「Current Opinion in Neurology and Neurosurgery」(Gower Academic Journals)が発刊された。隔月刊で、各巻ごとにとりあげる分野が分かれており、各テーマについて概説し、多数の文献が紹介されている。各文献には「・」印でランクづけがなされたうえで、簡単なコメントが付けられており、読者が効率よく文献を調べられるように配慮されている。国内誌でとりあげた2種類の Year Book と比べると、筆者の個人的な意見としては、本誌の方が有用性が高い。

## 5. 分野別専門誌

先に述べたように神経学の分野は幅広く、100以上の雑誌が出版されている。ここでは、各分野を代表する一般的な雑誌を1〜2種類程度取り上げることにする。

神経病理では「Journal of Neuropathology and Experimental Neurology」(Lawrence:Allen Press)が米国神経病理学会の機関誌の役割をしており、レベルが高い。ヨーロッパでは「Acta Neuropathologica」(Berlin: Springer)、「Neuropathology and Applied Neurobiology」(Oxford: Blackwell)の2誌がある。前者は国際誌として、本邦からの投稿も多かった。神経生理の分野では「EEG Journal」の愛称をもつ.「Electroencephalography and Clinical Neurophysiology」(Amsterdam:Elsevier)が代表的で、神経放射線では「American Journal of Neuroradiology」(American Society of Neuroradiology の機関誌)と日本およびヨーロッパの神経放射線学会の機関誌である「Neuroradiology」(Springer)が挙げられる。

個々の疾患を対象とした雑誌があり、脳卒中では1970年にAmerican Heart Association から刊行された「Stroke」、頭痛では「Headache」(American Association for the Study of Headache の機関誌) とインターナショナルジャーナルの「Cepharalgia」(Norweigian University Press)、その他1970年代後半から80年代中頃にかけて、神経筋疾患を対象とした「Muscle and Nerve」(Boston:Houghton Mifflin Medical Pub)、不随意運動など運動障害をターゲットにした「Movement Disorders」(New York:Raven Press)など、歴史は浅いが質の良い雑誌が発刊されている。

これら以外に「Journal of Neurochemistry」や「Journal of Neuroimmunology」のように神経云々と銘打った雑誌が多くあるが、基礎的な内容が多い。「Dementia」など痴呆に関するものや高次機能を扱ったものがあるが、いずれも紙面の都合上割合させていただく。

## 6. おわりに

私は本が大好きである。雑誌の最大の役割は、情報を活字として早く正確に読者に届けることにあると思う。つまり伝達するための道具である。しかし図書館で書棚に整然と並べられている蔵書の列を見るとき、そこには別の感慨がある。先人の培ってきた歴史そのものであり、たった10ページの論文のためにどれだけの金と汗が流されたか想像する時、それは単なる道具ではなくなっている。情報を伝えるだけなら、今や電子メディアの方がはるかに便利である。本など場所をとって保管が面倒なだけ、という考えもある。それでも本は捨てられない。情報手段としては化石となった古い雑誌でも、変色した紙の肌ざわり、古い活字、写真のかわりに書かれたスケッチなどが、はるかな先達の考えを、そっと教えてくれるような気がする。

本はどんな情報手段が現れても、とって変わることができない文化である。医学雑誌で

あっても何ら変わることがない。私が所属していた大学の研究室には「Brain」が第1巻からそろっていた。調べるためではなく、時にページをめっくてみると、そこには満たされた空間があった。

最後に、情報手段の最も良い評価方法のひとつであるインパクトファクターを参考までに表に示しておく。他の分野に比べ一般に高い。今、神経学が躍動しているからにちがいない。

表　神経学分野の雑誌の Impact Factor（1996年）

| | |
|---|---|
| ＜神経学一般＞ | |
| 1. Annals of Neurology | 8.715 |
| 2. Brain | 5.739 |
| 3. Neurology | 4.612 |
| 4. Archives of Neurology | 3.778 |
| 5. Journal of Neurology Neurosurgery and Psychiatry | 2.930 |
| ＜分野別（各分野の代表1誌）＞ | |
| 1. Journal of Neuropathology and Experimental Neurology | 4.784 |
| 2. Stroke | 3.804 |
| 3. Movement Disorders | 2.281 |
| 4. Electroencephalography and Clinical Neurophysiology | 2.027 |
| 5. Muscle and Nerve | 2.026 |
| 6. American Journal of Neuroradiology | 1.750 |
| 7. Headache | 1.566 |
| ＜神経科学＞ | |
| 1. Annual Review of Neuroscience | 33.625 |
| 2. Trends in Neurosciences | 17.755 |
| 3. Neuron | 16.953 |

出典「Journal Citation Report®'1996」